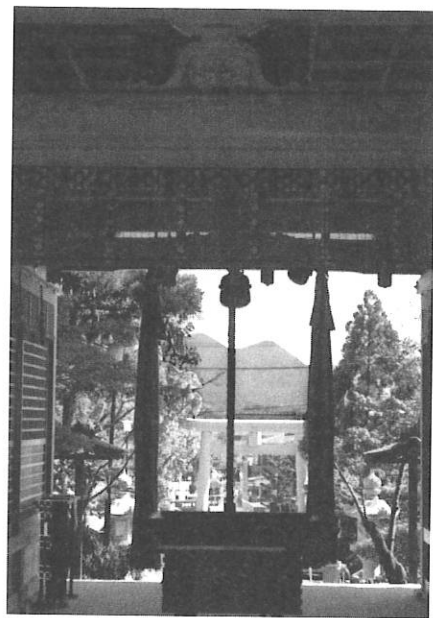




美具久留御魂神社（正面）



美具久留御魂神社から望む二上山

岳と雌岳の間のくぼみから、朝日が昇ってくるのを見られよう。宮司さんに聞いてみたら、案の定、その通りだった。きっと夫婦の間から子が生まれるような光景だろう。といっても、太陽をお祭りするような伝統はないのだと言う。

ここはもともと蛇の害に苦しむ地帯で、崇神十年、それをオオクニヌシの荒御霊の仕業とみなして、彼を祀りだしたとのこと。それが、例の「玉菱鎮石」の託宣があったから、ここを「美具久留御魂神社」として祭るようになったという。国津神系だから太陽信仰はないのだから。

うと言われた。

それにしても、ここがどうして丹波国（兵庫県）氷上の小児の託宣と結びついたのか、という、理由説明がまるでないのだが、どこかに心意伝承の痕跡が残っているのではないか、そう思っただけ時間も忘れ、歩きまわってみた。地図をひろげてみると、美具久留御魂神社から見る二上山は、ま東からやや北東に、だいたい五度ほどずれているが、それくらいなら春分秋分の朝日を拝むのに不都合はないようだ。それによく見ると、この美具久留御魂神社と二上山とを結ぶ線を、そのまま右側、つまり東の方へ延長すると、ちょうど三輪山と長谷寺が乗ってくる。つまり美具久留御魂神社は東に二上山と正対し、その背後の三輪山すなわち大物主神をも見据えていることになる。太陽の道であると同時に、出雲の神が祀られるラインでもあるのだ。

裏山へと続く道がある。途中にふたのされた井戸があった。涸れてしまつて今は使われず、草木に埋もれかかっている。通り過ぎて登ってゆき、頂上へ出た。

そこは古墳であり、「ガマ塚」ともいう。沖繩に散在する鍾乳洞を、やはりガマというが、同じような心持だろうか。「釜」のように、大事なものを内側に蓄える印

象とかかわるかもしれない。

ここに、朽ちかかった一つの説明板があった。「地祇遥拝所」とある。

「この山頂にて水槽に水をたたえて月影をうつし国津神を遥拝したと申」

私はその場に釘付けになった。動悸を感じ始めた。落ち着け。今、何かがわかる。

やはり釜だ。やはり水だ。おまけに月か。この古墳の頂の広場で、水槽にたたえた水に、月の光を映す。当然満月を映すのだろう（実際、毎月の満月祭がかつて行われていたらしい。途中で見かけた涸れ井戸の水を、以前は汲んで使ったという）。満月の光を水に映すことが、イコル国津神を遥拝することになるという。水に映った月影が神。

そうか！ 水泳御魂とはこれか！

月それ自体ではなくて、水だけでもなくて、水底に沈む何らかの実体ある物品でもなくて、「水に映る月影」のような、実体はないが天と地の生命である光と水とがひとつに融合している相、それが「水泳御魂」だったのか！ それこそが、「底寶御寶主」だったのか！

宝を、何らかの品物とばかり考えていたのは間違いだ

った。誰もが心に焼き付いて離れない鮮烈な霊景が宝であり、おそらくは水草や石までも月光に反射してこの世のものとは思えないほどの輝きを見せたことだろう。「玉菱石」の「菱」とはアサザのことでもある。睡蓮のように円形の小ぶりの葉を水面に浮かばせる。月に照らされたこれらの光もまた、鏡であり玉なのであった。

月のタマをのむという心意伝承

あるいはその「宝」に満ちた水を服用さえしたのではなからうか。命の水に神の精を移して、それを呑むことが、我が身に神霊を充滿させることも、感じられただろう。

というのも、『古事記』の雄略天皇条に、以下のよう
な不思議な、しかも忘れられない記事があったからだ。

天皇が長谷の百枝槻のもとで豊樂(宴会)をしたときのこと。伊勢国の三重の采女が、大御酒をたえた盃を天皇に奉ったとき、たまたま百枝槻の葉が落ちてその盃に浮かんでいた。それを見た天皇は激怒して三重の采女を打ち伏せ刀を抜き、その首をはねようとした。そこで三重の采女が歌を歌った。大要は次の通り。

「皇居は朝日夕日に照らされ竹や木の根が根づく宮 豊かな土壌に築かれた宮 かがわしい檜で築かれた宮殿の新嘗を共食する殿舎のそばに生い立ちみごとに繁った槻の枝々は 上枝は天を覆い 中つ枝は東国を覆い 下枝は西国を覆う 上枝の葉が中つ枝の葉に落ち 中つ枝の葉が下枝の葉に落ち 下枝の葉は三重の采女がささげる盃に 浮いた脂のように落ちつかり 水がコオロコオロと凝り固まるようにして浮いている 恐れ多いことです 日の御子様 事の語りごはこのように」

これを聞いた天皇は、采女の罪を許した、とある。この話こそ、私には意味がわからなかった。歌の内容以前に、盃に槻の葉が浮いたから采女を殺そうとした、という時点で、思考がストップしてしまう。百枝槻(この言葉の音がまた美しい)の葉が盃に浮かぶ。いいじゃないですか、風流なこと。なのになぜ殺そうとする? つい、そう思ってしまう。

よく考えたら、私は現代感覚で判断しようとしていたわけだ。最終的に槻の枝葉に天地万物の霊力(収斂)を見出す話だから、『古事記』編者は最初から「百枝槻」という美しい言葉で、この場面を語ってしまう。だから冒頭から読者は「美しい百枝槻」のイメージが頭の中を占



美具久留御神社地祇遥拝所

拠してしまうのだ。よって雄略天皇のふるまいが初めからさちがいじみて見えてしまう。

逆であった。
新嘗祭のあと、宴会の場で飲む盃には、何か別のものが映るべきであったのだろう。新嘗祭が旧暦十一月中旬の辰の日というのがこの当時から風習としたら、とくに満月の日とは限らない。だから何が映るのを期待していたかは不明だが、少なくとも槻の葉が浮かぶのは期待に反するものであり、そのような不愉快なものを、修正もせず差し出す相手に、何か自分へのあてつけや呪詛を見出した、という理屈だったかもしれない。
あんがい、月が映るのを期待したのに槻でちやかされた、ということだったかも。

ともかく雄略天皇は怒った。それにはたいして三重の采女もみごとにやり返した。こうわかってくると、采女の切り返しが実は超大技だったと驚かされる。

簡単にまとめると霊力の循環、リレーである。太陽から始まって、霊威がバトンタッチされることに、前者までの霊力がどんどん累積して、最終的にたどり着いた槻の枝葉に宇宙そのものが凝縮し、盃の中でイザナギイザナミ二神の国土創世神話が再現されたというのである。

イメージを拡散させたうえで、マクロをミクロに転移させた、風流と言えればこれほど風流なものはない粋な宝を、つつまじやかにプレゼントしてしまう。こんなすさまじい才気に触れた男は皆、だらしなく喜んでめろめろになってしまおうだろう。

ちなみに、上田篤の最近著『庭と日本人』(二〇〇八年 新潮新書)にも月光をのむ事例が取り上げられている。京都大徳寺の大仙院の書院で、千利休が秀吉を招いて茶の湯をもよおした時のこと。東の枯山水の庭から月がのぼった。そこで利休が庭の平らな石の上に銅の水盤を置いた。するとその水盤にも月が浮かび、秀吉がいたくよろこんだ、という。この故事が蹲のおこりとも結びつくと、上田は考えている。

蹲とは、茶室の出入り口(躡口)に近いところに低く設置された手水鉢で、手を洗うのにしゃがむ(つくばう)ことから言う。これがなぜ水盤の月と結びつくのか。

「というのも蹲はいっぱんに東、つまり満月のである方向におかれるからだ。すると柄杓にも、柄杓の水を受けた手の平にも月がやどる。それを飲みほす。月の夕まを身につける」(二二八頁)と、上田は言う。

「出雲神宝」 夢想

まだ今の段階では「出雲神宝」そのものが、この「水御魂」だったと断定できるわけではない。あくまでも大和朝廷側の人々による、「出雲神宝」感覚の表現にすぎない。実際の出雲神宝とは、いったい何だったのだろうか。

次第に私は妄想に浸り始めた。

疑い出すときりがないが、そもそも出雲振根を斃したという記事自体、眉唾ものだ。そのくだりの記事(一六七頁の③)があまりにも簡略だが、内容はかなりのおことなのだ。

派遣されたという吉備津彦と武渟河別は、いわゆる四道將軍のうちの二人である。

四道將軍とは、崇神天皇が大和朝廷による全国への王化政策のため、即位十年時に組織した四つの軍団のリーダーで、北陸・東海・西道(山陽道)・丹波(のちの丹後も含む)へと派遣されている。

吉備津彦は西道、武渟河別は丹波であったが、要するに四つの主力軍団のうちの半分を割いて、出雲一國の制圧にあたっているのだから、崇神朝にしてみればまさに



蹲(つくばい)

まさに目からうろこであった。茶の湯のように、どんなに哲学的、理論的に体系づけられた文化様式であっても、その土台を支えるのは原初からの感覚・心意伝承である。あんがい身近なところに古代人が重視した「神宝」が転がっていたりもする。感覚が鈍いと、どんなに物があふれていても、そのおいしさやすごさはまったく味わえない。惜しいことだ。

存亡をかけた戦いという覚悟があったことになる。

よく考えてみると、出雲は、オオクニヌシ神話に示され、また縄文・弥生考古学からも指摘されるように、筑紫(北九州)や越(日本海沿岸地域)と古くから連合した強大なクニでもあった。もちろん交易による連合だから、いろいろあっても一枚岩ではないが、それでも新興崇神朝の主力半分の割いても勝ち目に乏しい、乾坤一擲の勝負なのではなかったか。

勝ったかどうかは別として、少なくとも大和政権が日本国の行政を担当するようになってからの「正史」には、多少余裕をもって、スリルとサスペンスも交えながら王化政策を遂行した物語になっているのに過ぎないだろう。

『出雲国風土記』出雲郡建部郷の条に、景行天皇の時代になって、「神門臣古禰を建部と定め」たとある。崇神紀六十年条の「出雲臣の遠祖出雲振根」と同一人物であったか、あるいは後継者であったにせよ、大和になかなか服従しないリーダーが、生き続けていたことを示している。

だから服従した出雲は、あえて実利を取ったのかもしれない。平安期の源為憲著『口遊』に「雲太、和二、

京三」とあって、これは日本の巨大建築物ベスト3という説が有力である。一位出雲大社四八メートルもしくは九六メートル、二位奈良の東大寺大仏殿四五メートル、三位は平安京大極殿。つまり後世まで出雲は、大陸をも含んだ巨大商業圏をおさえて富を蓄え、全国ナンバーワンの建築技術、文化文明を保持していたというわけである。

いずれにせよ、出雲神宝の実質はまだ霧の中だ。おそらく玉とか鏡とか剣とか土器などの製品はもちろん、材料・資源としての鉄・ヒスイ・黒曜石・アスファルトなどといったものは、大陸（中国・朝鮮）―北九州―日本海沿岸部―北海道―樺太―アムール川流域商業圏を流通させる、商品にすぎない。そうした物流や生産・消費を支えるには一定地域内での通貨のようなものが必要で、いずれかの大社が中央銀行のような権威をもたなくてはなるまい。そのためには人々の総意信仰を得られるような祭祀が必要なわけで、それによって「神霊のこもった」貝や干魚や穀物や布帛や鎌などが、一定の価値の量を備えた「物品貨幣」としての役割を、もちえたはずである。

一つの信仰圏が、一つの通貨摘要圏となろう。

て、実質頭の上がない時代に「正史」に記すことは、あまりにもシャレにならず、伏せたのかもしれない。

こうしてしばらくは、戦国期の大坂堺のような自由貿易都市を、何倍にも大規模にした国際商業都市が、日本海沿岸部に繁栄した……。

へたくそな小説みたいなお話を考えつつ呆然とたたずんでいた。

ふと気付いて時計を見ると、本来の目的だった奈良のお祭りの時刻は過ぎている。今から行っても間に合わない。なんともはや、笑うしかなかった。

この美具久留御魂神社には別称がたくさんあり、なかに「和邇宮」というのもあった。今も近くに龍神社があり、池も多いが、このお宮自体が水神でもあるのだ。「下水分社」とも言われるらしい。ここより南の方、南河内郡千早赤阪村に建水分神社があり、それを「上水分」としての、対称であるとのこと。

いぜんとして、氷上に降りたと信じられている託宣に由来する神社が、なぜこの場所にあるのかははっきりしないが、こうして水分信仰も伴っていると知って、私は少し納得した。

したがって、本質的神宝とは、その中央銀行たる社の祭祀そのものではないか。希少価値の高い品物（いわゆる宝物）をいくら中央政府に取り上げられても、通貨発行なり徴税なりの権威を庶民に認められている限り、実利は自分たちのもので、別段痛くもかゆくもないのではなかったか。

崇神朝が四道將軍の派遣を通して通貨統合を図ったものの、日本海沿岸は各地に点在する潟湖が天然の良港として、縄文以来の盤石の商業圏を構築してしまっており、その盟主たる出雲オオクニヌシ信仰には、太刀打ちできなかった。

日本のへそたる大和に陣取って行政権を確保した崇神朝は、筑紫・出雲・越連合には朝貢を義務付ける程度で、日本海の交易権は認めざるを得なかったろう。むしろ出雲神を三輪山に祀って中央銀行の支店を開き、いざれこちらを本店とし、大和の天皇が総裁となる機会をうかがうしかなかったのではないか。

それにしても垂仁紀二六年で出雲神宝を把握したと述べているのだから、やはり美具久留御魂神社の満月祭が、出雲神宝の正体だったのかもしれない。太陽神アマテラスと折り合う余地のない祭祀だけに、出雲にたいし

小児の託宣の舞台になったという水上もまた、水分なのである。

しかも、「日本一低い中央分水界」なのである。がぜん、気になってくるのではないか。よし、これから水上へ行こう。

注

- ・ 山田孝雄「崇神天皇紀にある小児の神託の詞」（『千家尊宣先生還暦記念 神道論文集』一九五八年 神道学会）
- ・ 水野祐「水泳御魂考―『日本書紀』の水香戸辺の子小児の神託説についての一考察―」（『古代の出雲と大和』一九七五年 大和書房）
- ・ 三品彰英「フツノミタマ考」（『三品彰英論文集第二巻』『建国神話の諸問題』一九七一年 平凡社）
- ・ 加藤義成「天之御舎と出雲大社の創建」（『出雲学論考』一九七七年 神道学会）
- ・ 新野直吉「古代出雲の国造」（『出雲学論考』一九七七年 神道学会）
- ・ 井上實「神門郡塩治の郷の伝承―出雲服属儀礼の祖型として―」（『出雲学論考』一九七七年 神道学会）

國文學 平成20年10月臨時増刊号 発売中 定価1785円

特集

文楽

人形浄瑠璃への招待

5228-7154

人形の役作りとかしら割り
—吉田文雀師に聞く

聞き手
後藤 静夫

〈コラム〉

文楽の配役

四つ橋文楽座

文楽の面白さ

○舞台が開くまで

●舞台鑑賞「本朝廿四孝」

○文楽のCD

○文楽の映像資料

〈人形浄瑠璃略史〉

○古浄瑠璃から近松へ

—演劇空間の創造

○人形浄瑠璃黄金時代

—戯曲の時代

横道 萬里雄

肥田 皓三

水落 潔

山田 庄一

富岡 泰

大西 秀紀

飯島 満

阪口 弘之

内山 美樹子

○浄瑠璃の十九世紀

—フシの変遷

○大正・昭和・平成の文楽史

—今日への歩み

〈文楽研究とその周辺〉

○民俗芸能と文楽

○近松と文楽

○近世語と文楽

○義太夫節の音楽学的研究

○「趣向」と「虚」

○歌舞伎と文楽

○寄席芸と文楽

○操り人形考古学

○五行本の世界—抜き本

◇ 文楽読書案内

倉田 喜弘

高木 浩志

齊藤 裕嗣

井上 勝志

坂本 清恵

垣内 幸夫

黒石 陽子

河合 眞澄

荻田 清

加納 克己

神津 武男

児玉 竜一

隔月刊の増刊号に学界時評が掲載されます。

- ・守屋俊彦「出雲建が佩ける刀」(『出雲学論考』一九七七年 神道学会)
- ・吉田修作「託宣考」(『古代文学』三四号 一九九四年 古代文学会)
- ・高島弘志「出雲国造の成立と展開」(『古代王権と交流7 出雲世界と古代の山陰』一九九五年 名著出版)
- ・菊地照夫「出雲国造神賀詞奏上儀礼の意義—神宝の検討を中心として—」(『古代王権と交流7 出雲世界と古代の山陰』一九九五年 名著出版)
- ・瀧音能之「『出雲』からたどる古代日本の謎」二〇〇三年 青春新書



写真で読む 世界の戦後60年

B5判変型 256頁 定価3800円(税別)

オールカラー

写真家集団〈マグナム〉の写真家たちが、戦後60年にわたって撮り続けた膨大な写真群の中から300点余りを厳選。写真と文章で戦後史を俯瞰する。

発行 魁星出版 発売 學燈社

お問合せは
〒169-8608 東京都新宿区西早稲田3-5-10
03(5228)7154 <http://www.gakutousya.co.jp/>